情報発信

鞠谷雄士*

今月は、毎年恒例の研究総覧特集号である。本特集は早くも9年目を迎え、そのスタイルも定着した感がある。筆者は、本誌の編集委員として、この研究総覧を何度か担当してきた。情報検索の発達した今日、特定の分野に関連する論文を集めるのは難しいことではない。むしろ、世界的に論文数が急増し情報過多となっている中で、質の高い論文、注目すべき論文をいかに効率よく選択するかがポイントとなっている。このような観点から本誌の研究総覧も、ご担当いただく執筆者による論文の評価に重点を置いたものにすべきと考えてきた。各執筆者に、原則として2年間ずつご担当頂いてきたのも、1年目は自分のスタイルに徹するのが難しくとも、2年目になれば、自由に個性を発揮して本音をご執筆頂けるだろうとの思いがあったからである。

ところで、研究成果の情報発信について、われわれは幾つかの問題を抱えている。つい先頃、韓国からの論文数が、ここ十年ほどの間に急増したという新聞記事があった。これは、同国の研究レベルが上がり、多くの情報発信が可能になったことを意味するのは勿論であるが、複数の知り合いの韓国人教授から伺った話では、米国のデータベース会社ISI社の公表するインパクトファクターの高い雑誌への論文掲載数が、研究業績評価の尺度として直接適用されることになったことが大きな要因になっているそうである。

インパクトファクターとは、ある学術誌に掲載された論文が他の論文で引用される回数の平均値を表す数字であり、その学術誌の影響力の指標になる。したがって、個々の論文の質が評価されているわけではないが、影響力の強い学術誌は掲載に対するバリアーが高く、論文の質も平均的に高いという暗黙の了解がある。インパクトファクターには、レビュー論文やスター論文（極端に被引用回数の多い特定の論文）の影響、恣意的な参考文献の選択など、幾つかの欠点があることも指摘されているが、研究分野によって程度の差はあるものの、日本でもこのような評価法が重要視されつつある。しかし、残念ながら現時点で我々の成形加工誌は、このデータベースに収録されていない。ISI社のホームページによれば、データベース収録の要件は、学術誌が定期的に刊行されていること、論文題目・要旨・キーワード・参考文献などが英語で記述されていることなどである。成形加工誌はこれらの要件の大部分を満たしており、

インパクトファクターを絶対視することの是非はともかくとしても、データベース収録の可能性は探っても良さそうである。

次に考える必要があるのは、成形加工誌に掲載されている論文のほぼ全てが日本語で執筆されていることである。世界に向けた情報発信という意味では、日本語の論文は残念ながらほとんど影響力がない。これまでも日本人による多くの偉大な研究業績が、日本語で執筆されたという理由で世界的には無視されてきた。また、プラスチック成形加工学会が、今後、アジアで中心的役割を担おうとする時にも、情報発信に用いる言語の問題がつきまとう。成形加工誌に掲載されている解説をはじめとする多くの貴重な記事が、単に日本国内向けとなっているのも、少々もったいない気がする。

しかし論文・解説は全て英文で執筆すべきであるという考え方には賛成できない。言語は文化の中核をなすものであり、科学・技術の分野と言えども、日本の言語文化をしっかり守る努力をすべきである。専門用語も、日本語で厳密な定義を定めておく必要がある。また、多くの日本人にとって、情報受け渡しの速さの点でも正確さの点でも日本語の方が有利であることを軽視すべきではない。（言語の重要性という意味では、方言もそれぞれの地方の文化を守り継承するために大事にすべきと言われている。そう言えば成形加工学会では、“好きやねん成形加工”、“きてみりゃあーせ成形加工”など、地方色豊かなキャッチフレーズを秋季大会で用いてきた）。

長い目でみれば、言語の問題は情報技術の発達により解決されるであろう。そう遠くない将来、学術誌に掲載される情報は（学術誌の印刷・出版が継続されるか否かにかかわらず）全てインターネット上で閲覧できるようになり、その内容は自動翻訳によりさまざまな言語へ変換できるようになるはずである。しかし当面は、各人が状況に応じて情報発信する言語を選択するしか方策がないような気がする。この時、日本語で成形加工誌に掲載された論文をそのまま英語に翻訳して外国の雑誌に掲載できるかという問題がある。論文のオリジナリティーを議論するなら、答えは否である。しかし、現実的に情報のサーキュレーションを高めるという意味では、例えば外国の学術誌と提携し、成形加工誌にオリジナル論文が掲載されていることを明記しながら、英文で再投稿することを許すという手段は考えられないだろうか。

* Kikutani, Takeshi
東京工業大学大学院 理工学研究科 有機・高分子物質専攻
東京都目黒区大岡山 2-12-1 (〒152-8552)
2001.7.4 受理